

# 出会い、ふれあい、心の輪



〈完全参加と平等〉

令和4年度入賞作品集

心の輪を広げる体験作文  
障害者週間のポスター

令和4年11月

富 山 県

## 目次

# 心ココロの輪を広げる体験作文入賞作品

## 最優秀賞

### 小学生の部

今、ぼくががんばっていること

富山市立草島小学校 五年

濱崎 穂色  
…………… 1

### 中学生の部

「普通」とは何か

高岡市立芳野中学校 一年

東 朔太郎  
…………… 3

### 高校生の部

この差ってなに？

富山県立南砺福野高等学校 三年

松井 彩吹  
…………… 5

# 優秀賞

## 小学生の部

心の輪を広げる体験作文

射水市立大島小学校 五年

本<sup>ほん</sup>多<sup>だ</sup>祐<sup>ゆう</sup>陽<sup>はる</sup>

……  
……  
……  
……  
8

## 中学生の部

誰もが安心して暮らせるように

高岡市立芳野中学校 一年

越<sup>むら</sup>村<sup>むら</sup>本<sup>もと</sup>小<sup>こ</sup>粹<sup>いき</sup>

……  
……  
……  
……  
10

障害のある人達との出会い

射水市立小杉中学校 二年

越<sup>こ</sup>野<sup>の</sup>叶<sup>か</sup>望<sup>のん</sup>

……  
……  
……  
……  
12

## 高校生の部

出会いふれあい心の和

富山県立南砺福野高等学校 一年

岡<sup>お</sup>小<sup>こ</sup>森<sup>もり</sup>あずき

……  
……  
……  
……  
14

考え方を変えることで

富山県立南砺福野高等学校 二年

岡<sup>お</sup>田<sup>だ</sup>彩<sup>いろ</sup>鈴<sup>り</sup>

……  
……  
……  
……  
16

# 障害者週間のポスター入賞作品

## 最優秀賞

### 中学生の部

目に見えない障害

黒部市立清明中学校 三年

細田陽衣

19

## 優秀賞

### 中学生の部

みち

黒部市立清明中学校 二年

小林幸

20

盲導犬は目と同じ

射水市立小杉南中学校 二年

長永結菜

## 参考資料

令和四年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」募集実施要領……………21

令和四年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」応募状況……………25

令和四年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」審査会審査員名簿……………26

本作品集に掲載する作文は、明確な誤字等以外は原文のまま掲載しています。

# 「今、ぼくががんばってゐるんだよ」

富山市立草島小学校 五年

濱崎 釉色  
はまざき ゆいろ

今、ぼくは支援級にいます。なぜなら、人との関わりが苦手だからです。

家では、すらすらと話すことができるのに一歩外に出ると、のどに何かがつまったように声が出なくなり、話すことができませぬ。また、なぜだか分からないけれど、いつも不安な気持ちでいっぱいになります。そんなとき、

「場面かんもく症」

と言われました。家族や先生の手を借りて、年長のときにやっと幼稚園に慣れ、登園できるようになりました。もうこれで小学校生活も大丈夫と思っていました。しかし、小学校に入学すると、学校や周りの人の空気が、がらりと変わりました。慣れようと努力してもついていけなくなり、学校へ行けなくなってしまうました。やっぱり人が大きらい。でも、勉強もしたいし、友だちもほしいという気持ちは今ももって

ます。このままではいけないと思っていたところ、発達障害の診断を受けました。それから、ぼくは、自分の特徴がちょっとずつ分かるようになり、今までよりも先生方に気にかけてもらえるようになりました。先生にもついていた、もやもやとした気持ちが徐々になくなっていききました。

そして、二年生のとき、保健室登校と通級指導教室に行けるようになり、通級の先生や保健室の先生など、話せる先生が増えていきました。

そんなある日、担任の先生から、

「釉色さん、学校で安心できる場所を増やしませんか。一度、支援級の教室をのぞいて見ませんか。」

と誘ってもらいました。行ってみたら、とても楽しくて、クラス友達と関わることがこんなにわくわくすることとは思いませんでした。だから、学校へ行ける日が少しずつ増え

ました。さらに行事にも興味をもち、思い切って参加することができました。けれども心の疲れがたまり、また学校へ行けなくなる日が増えていきました。せっかく支援級に移ったのにどうしよう、と不安な日々が始まりました。しばらくして、母に、

「今度、放課後等デイサービスに行ってみんげ。」

と言われ、不安だったけれど、何か変われるのではないかと  
思い、行ってみることにしました。そこは、ぼくにとって、とても安心できる場所でした。指導員の方がとても寄り添ってくれて、いろいろなことを教わるうちに、自分に自信がもてるようになってきました。

五年生になって、担任の先生と、

「交流級で十五分間授業を受けてみよう。」

と約束しました。交流級で十五分間授業を受けていると、交流級の友達に声をかけてもらえるようになり、だんだんところの中に入りたいと思えるようになりました。そして、一学期の終わりには、交流級の授業に最初から最後まで出られるようになりました。

ぼくはこの経験を通して、前より心が少し軽くなりました。それは、自分にちよっぴり自信がもてるようになってきたことと、支援級や交流級の友だちと関わることで、人は怖くな

いということが分かってきたからです。

これからは、支援級とか交流級とか関係なく、いろいろな人とふれあうことで、ぼくがどんなふうに変わっていくのか不安だけ楽しみです。また、ぼくと同じようなことで困っている人がいたら、家族や先生、友だちがぼくのそばで力づけてくれたように、ぼくもそういうことができる人になりたいです。

# 「普通」とは何か

高岡市立芳野中学校 一年

ひがし  
東 さくたろう  
朔太郎

僕の弟は、ダウン症という障がいをもって産まれました。ダウン症の人は、細胞の中にある染色体というものの数が普通の人より一本多いそうです。普通の人染色体は四十六本です。だから、ダウン症の人の染色体は四十七本あることになりました。

弟は世間では、「障がい児」と言います。また、僕のような障がい児の兄弟は、「きょうだい児」と言うそうです。僕は、そんな言葉があると知ったとき、悲しいような悔しいような、何とも言えない嫌な気持ちになりました。弟も、そしてその家族である僕たちも「普通じゃない」と差別されているように感じたからです。

弟は八歳ですが、上手に話すことができません。代わりにジェスチャーを使って自分の気持ちを表現しています。でも、それ以外は「普通」の八歳と同じです。毎日ご飯を食べお風

呂に入ります。学校に行き、家では宿題をしています。怒ったり泣いたりもします。そして、弟はよく笑います。また、他の人がしないような勘違いをしたり、ユニークな動作をしたりして僕たちを笑わせてくれます。弟がいると、家の中が明るくなります。弟は我が家のムードメーカーです。

弟の「普通じゃない」ところを探そうとするうちに、何が「普通」なのかわからなくなってきました。僕は、「普通」の人なんていないのではないかと思えます。同じ人間なんて一人もいないからです。

世の中には、さまざまな差別があります。障がい者差別はもちろんですが、人種差別や性差別など、何年も前から問題になっています。僕は、差別は、自分とは異なる人を「普通じゃない」と決めつけるところから始まるのではないかと思えます。相手のことを知ろうとする前に決めつけ、関わろうと

しないことが差別がなくならない原因なのではないでしょうか。

僕は、差別をなくすためには、人は、一人一人違っているという当たり前のことをみんなが理解すること、自分とは違う人のことをもつと知ろうとする思いやりの気持ちが大切だと思います。そして、相手と自分との間に大きな違いがあったとしても、関わっていくことが必要だと思います。

僕には、これから弟と関わるときに心がけたいことが二つあります。一つ目は、手伝いすぎないことです。僕の弟は、さまざまなことをするのに時間がかかり、手助けが必要です。気持ちを伝えるときにも、ジェスチャーだけでは相手にうまく伝わらず、見ていてもどかしくなります。そんなとき、僕はすぐに手助けをしてしまいます。でも、それは弟のためにはなりません。一人でできないことがたくさんあるまま大人になって、困るのは弟だからです。弟は、宿題をされていてわからなくなるとやめてしまいます。それを知っている僕は、答えを教えてしまいます。本当は自分で考えた方がいいと思っているのに、つい教えてしまうのです。これからは、弟のために、見守ったり、やり方を教えたりしていきたいです。そして二つ目は、人の気持ちを考えられるようにしてあげることです。今、弟は、自分のことに精一杯で、人のことを思

いやることはできません。これから、いろいろな人と関わっていくために、弟には、人の気持ちを考えられるようになってほしいと思います。少しずつだと思いますが、されてうれしいことや嫌なことを教え、分かってもらおうと思いません。

「普通」の人よりできることが少ない弟ですが、それでも、できることはどんどん増えています。周りの人も、障がいをもつ人自身も「普通じゃない」と決めつけることなく、思いやりの気持ちをもつて関わっていける社会をつくっていきたいです。



# 「この差ってなに？」

富山県立南砺福野高等学校 三年

まつ い い ぶき  
松 井 彩 吹

高2の秋だった。部活命だった私は、チームメイトと方向性が合わなくなり、なんとなく学校に行きたくないと思う日が増えた。元々気負いややすい性格で、キャプテンをしていたこともあり、頭を悩ませることも多かった。朝、目が覚めると身体が鉛のように重く起き上がることができない。定刻になっても起きてこない私に対して、母が起こしに来た。一向に起きる気配がないので、無理やり起こそうとする。いたって普通の光景だろう。しかし次の瞬間、私は涙で顔を濡らし、

「触らないで。怖い。近づかないで。」

と思いのままに言った。母もショックだっただろう。言い合いいになり、結局その日は欠席した。毎朝学校に行くことをこじらせる私に対し、

「なんでそんなことをするの。もうこれ以上、お母さんや家

族に迷惑をかけないで！」

母も泣き出した。この言葉をかけられた瞬間、孤独を感じた。一人だ。みんなに迷惑をかけてしまっている。誰にも必要とされていないのだ。このまま消えてなくなってしまうたいと。ここから私の生活は一変する。激しい頭痛、めまい、猛烈な不安感、気が狂いそうになるほどの閉塞感、対人恐怖に襲われた。しかし、特に事の重大さに気付くこともなく、なんか変だなと思う程度だった。元々人と話すことが好きな私だったが、声を出すことすら怖くなり、声を発さない日も少なくなかった。そして、親の勧めで何度か病院に通うようになる。そこで心の病と診断された。精神疾患という何となく重く考えられそうなので、ここでは心の病と呼ぶことにしよう。最近では、老若男女問わず心の病を患っている人は少なくないし、自分自身福祉系の学科に通っているため、特に偏見や

抵抗はなかった。しかし、まさか自分がそんな風に診断されるなんて思ってもいなかった。その時初めて身体が悲鳴を上げていること、身体がSOSを出しているのだと気付くことになる。私は、複雑な気持ちになった。診断されたことで対策が立てられるというメリットもある。しかし、心の病を患っている子というレッテルが貼られることに何か引かかる自分がどこかにいた。身体障害に比べて、精神障害や知的障害は、敬遠されがちなイメージがある。心の病を患っていることで、周りから相手にされなくなるのではないかと不安だった。そんな時、実際に現場に出向き学ぶ、介護実習が行われた。私が実習をさせていただいたユニットでは、感情の浮き沈みが激しい女性の利用者さんがおられた。あの日から話すことにすら抵抗を感じていた私だったが、なんとなく、その利用者さんには、話しかけたくなかった。毎朝挨拶をし、介助の隙の時間があれば積極的に話しかけるようにした。特に何かを言うわけではなく、相槌を打ってくるだけだった。そんなある日、私に手招きをしてきたのだ。私に何か訴えてきている気がして、急いで向かった。

「今日は調子がいいから、話し相手になつてくれんけ。」  
と言ってきた。私は、話してくれたことに嬉しくなった。利用者さんは続けて話してくる。

「身体障害に比べて、精神や知的は理解が少ないからね。若くて有名な子なら、みんな理解するのにな。」

とテレビを指さしながら言ってきた。同感だった。自分が実際に、心の病を患ってから、同じことを感じていたからだ。有名な芸能人やインフルエンサーが「私は疾患を患っている」と公表すると、多くはあたたかい言葉が飛びかうと思う。しかし、実際どうなのだろうか。もちろん本音であたたかい言葉をかけているとは思うが、「有名人だから」、「インフルエンサーだから」ではないだろうか。肩書きがなくなった瞬間、一人の人間としてそうなったとき同じことが言えるのだろうか。自分の身の回りの人がそうなったときはどうだろうか。ぼーっと考えていると、利用者さんが私の顔を覗き込んできた。私は利用者さんと話していたことにハッと、慌てて私も同じような境遇にいたと言った。すると、さらに話が弾んだ。

「もつと当たり前になればいいのにな。共生社会って言うぐらいなんやから。」

と利用者さんがボソツと言った。もちろん人それぞれ価値観や考え方が違うのは自然なことだ。でも、もつと簡単に考えてほしい。高齢者に席を譲るくらいの。障害があるのにかかわらずに誰もが暮らしやすく、配慮しあうのが当たり前な

社会作りが必要だと思う。私は、利用者さんの言葉に重みを感じながら実習を終えた。今考えれば、母が「家族に迷惑をかけたくないで」と言ったのも、心の病についての理解が浅かったからだと思う。そこでまだまだ理解が浅いのだと、改めて感じさせられた。

その後の私は、周りの方のサポートもあり安定して、学校にも元気に登校できている。しかし、いつ体調が悪くなるのかという不安と戦っている。現在進行形で苦しんでいる人に伝えたい。世界は一つではないと。十七年しか生きていない私だけど、人生で一番悩んだのではないかと思うくらいのお出立事だった。でも、大好きだった部活を泣く泣く辞めた今の生活は、嫌いじゃない。むしろこんな世界もあるのだと、視野が広がったと思う。ずっとしたかったことに時間を費やせ、普段関わることのない世代の人たちと関わるが増え、コミュニティが広がった。考え方も前よりポジティブになり、周りを気にしなくなった。樂觀的になった。この体験を通して、もっと障害に対しての意識が高まってほしいと感じた。障害がある人ばかりが我慢するのは、違うと思う。その為にも、今私ができることを少しずつでも行いたい。配慮しあうのが当たり前の社会を。障害があるないに関わらず、共生する社会を。

# 「心の輪を広げる体験作文」

射水市立大島小学校 五年

本 多 祐 陽  
ほん だ ゆ はる

私は小学一年生の時から手話サークルに、通っています。私の通っている手話サークルでは、耳が聞こえるけんじょう者のかたと、耳が聞こえないちょうかくしやうがい者のかたがいます。

私が手話を習ったきっかけは、私のおばあちゃんとお姉ちゃんの手話サークルに通っていたのでおためしで手話サークルにつれていってもらいました。ちょうかくしやうがい者の方とふれあつてとても楽しかったので、手話を習いたいと思います。

サークルでの活動内容は、けんじやう者の方とちやうかくしやうがい者の方がいっしよに楽しくふれ合えるように、五十音の単語を表す指文字や、単語を組み合わせて作った手話を使ってかんたんにできるゲームや会話を、しています。そのほかにも、ちやうかくしやうがい者のかたといっしよにジ

エスチャーを使った伝言ゲームをしたりしています。

私はサークルで手話を体験して、けんじやう者の方とはちがつて、しやうがいをもっているかたと、仲よく楽しくふれ合うことができます、とてもよい経験になりました。そして、私がサークルでけんじやう者やちやうかくしやうがい者のかたたちの前で発表する時に、手話がまちがつていた時や、手話が分からなかった時に、いつもやさしくゆっくり、分かりやすいように教えてくださっています。しやうがい者の方が前に出て発表している時に、手話を読み取れなくて分からなくなつたところがあつたらもう一度手話をくり返し表してくださっています。とても楽しいサークルなので、今日は何をするのだらうと思ひながら、わくわくしながらいつも手話サークルに通っています。

私が小学二年生の時に文化の集いがありました。そこには、

ほかの場所の手話サークルに通っている方たちが、たくさん集まりました。そこでは、かくサークルの手話を使った、発表会がありました。その中でも手話でクイズを出してふれ合ったりしていたサークルや、歌を歌ってその歌のかしを手話で表していたサークルもありました。私の通っているサークルは、ぜんいんドラえもんのかっこうになって、けんじょう者の方や、ちようかくしようがい者の方いっしょに、ドラえもんの歌に合わせて、ダンスを発表しました。文化の集いで、発表会をするためにサークルのみなさんと何回も練習して、サークルの方たちとふりつけをおぼえました。ちようかくしようがい者の方はながれているドラえもんの歌が聞こえないので、けんじょう者のダンスやリズムを見て、ダンスをがんばっておぼえました。私は文化の集いを参加してみても、多くのちようかくしようがい者の方たちや、ほかの手話サークルの方たちとクイズや歌、ダンスなどのいろいろな発表でふれ合えることができ、とても良い経験になりました。

私は、けんじょう者の方としようがい者の方が、もっとふれあいを広げていけば良いと思いました。そして私のしよう来にも手話をつなげていきたいと、思いました。

# 「誰もが安心して暮らせるように」

高岡市立芳野中学校 一年

むらもとこいき  
村本小粋

私の祖母はろう者です。ろう者とは聴覚障害者のことです。音が聞こえない祖母とは、ただ会話をするだけでも一苦勞です。自分の話が祖母に伝わっているのか不安になるし、祖母の言いたいことがきちんと理解できているのかも分かりません。また、耳が聞こえないために、祖母はテレビをほとんど見ないので、共通の話題が見つからないこともあります。祖母は近くに住んでいるので、一緒にごはんを食べることも少なくないのですが、少し前までの私は祖母と会っても、何を話そうか、どうやって話そうか、そんなことばかり考えていて、全然会話しようとしていませんでした。

しかし、あるとき、父が軽い調子で「筆談してみたら。」

と私に言いました。それはいい考えだと喜ぶ一方で、文字を書くのは時間がかかるし、少し面倒な気もしていました。そ

んな私の気持ちを察したのか、父は筆談アプリを教えてくれました。それは、指で文字を書くことができるというものでした。使ってみると、とても便利で、わざわざ道具を使わなくてもよいように、手書きの文字の温かさも感じられます。また、画面を見せるだけで、自分の言いたいことが伝わるので、スムーズに会話することができます。

アプリを使えるようになってからは、我が家の飼い猫について話したり、祖母の家の犬の写真を見せてもらったりするようになりました。祖母と楽しく会話できることが、とてもうれしかったです。私は、祖母との交流が増えたことで、今までよりも祖母のことを身近に感じられるようになりました。祖母とは「LINE」を使つてのやりとりもします。近くに住んでいると言つても、毎日会うわけではないので、祖母からメッセージが届くと、元気にしていることが分かってな

んだかほっとします。耳の聞こえない祖母とは、電話で会話することはできません。そのため、「LINE」は離れて暮らす私たちにとって欠かせないアプリです。

私たちには何気ないことでも、障害のある人たちにとっては難しいこと、できないことがあります。例えば、ろう者である祖母にとっては、スムーズに会話をすること、電話をすることは困難なことです。しかし、筆談アプリを使えば、お互いにストレスを感じることなく、会話をすることができます。「LINE」を使えば、離れていてもコミュニケーションを取ることができます。現代は、技術の進歩によって、障害のある人でも、できることが増えてきているのではないかと思っています。

私たちは、障害のある人を自分たちと区別し、「できない」と決めつけてしまうことがあります。しかし、ひと工夫すること、できるようになることはたくさんあります。だから、私は、障害のある人も安心して暮らせる社会をつくるために、どうすれば、障害のある人がない人と同じように過ごしているのか、ということを考える必要があると思います。

今、私が不安に思っているのは、祖母は電話ができないということです。さまざまなものの問い合わせや手続きに電話が必要なことが多く、祖母は困っています。今は父が代わっ

て電話をするなどして解決していますが、何かいい解決策があると思います。祖母の生活を助けるためのひと工夫をこれからも探し続けていきたいです。

# 「障害のある人達との出会い」

射水市立小杉中学校 二年

越こし野の叶か望のん

皆さんはこれまでに、障害のある人達に出会ったことはあるだろうか。私は、この春アメリカから帰国したばかりの帰国子女だが、アメリカに住んでいた時、いろいろな障害のある人達に出会った。その経験を通して、学んだことや考えたことについて書こうと思う。

まず、英語で障害のある人達のことを表す言葉は「Disabilities」と言い、文字通り「能力がない、できない人達」という意味になってしまう。この点については、日本語と同じ流れで大昔の人達は言葉を作り出したのだろうと推測した。では、実際にそうなのだろうか。

私が小学四年の時、クラスメイトにダウン症の女の子がいた。彼女が話そうとすると、口を上手に動かすことが出来ずよく聞きとれなかったが、日本で言う特別支援教育支援員が意味を理解し、説明してくれたおかげで、彼女の言いたいこ

とがしっかりと伝わり、コミュニケーションが図れた。彼女の笑顔はいつもクラスで弾けていて、みんなのマスクोटだった。また、妹の友達で、先天性四肢欠損の小さな女の子もいた。その子は、片手の手首から先が無く、棒のように丸くなっていて、物を持つ際、別の手か母親に持ってもらい対応していた。でも、彼女は誰よりも社会的でかわいらしく、アクティブな子だった。バランスを崩すこともなくキックボードを乗りこなす彼女は、とても格好良く見えた。

私は、彼女達の境遇に自分の身を置くと想像した際、まず最初に「生活することが辛いのではないのだろうか。」と思った。だがすぐに、その考えは間違っていることに気が付いた。彼女達は、もちろん進んで障害のある人生を選んだ訳ではないが、幸福なことに周りにはいつも支えてくれる人達がいて、彼女達らしく充実した人生を過ごしていたのである。



次に、障害のある人達を支える方法とその難しさについて、考えてみた。「障害」と一言で言っても、多種多様であり、それぞれ必要とされるサポートは異なってくる。例えば、知的障害の人達へは、コミュニケーションに関する配慮や心理・身体面での配慮が必要となる。また、身体障害の人達へは、体の不自由な部分のサポートはもちろん、環境・心理面での配慮が必要となる。このように、個々人への柔軟な対応が求められる点で、支援する側の難しさを感じた。

最後に、単純に疑問に思ったことは、私が育ったアメリカの地域では、障害があろうが無かろうが、ほとんどの子供達は公立学校で一緒に学び、建物を含めた施設や手厚いサポートはもちろん、心的にも完全なバリアフリーを実現していたが、日本では、そうは感じられないのは何故なのだろうか、ということだ。

忘れてはならないのは、障害のある人達も私達も同じ人間であるということだ。お互いを思いやる気持ちを持って、一緒に暮らすことが大事なのだ。これからも、私は心を通わせることが出来る人であり続けるよう努力していきたいと思っている。

# 「出会いふれあい心の和」

富山県立南砺福野高等学校 一年

小 森 あずき

中学生の夏、必ず帰り道、踏切を通る。同じ時間に必ず。そこで毎日の様に車いすの人が渡ろうとしている姿を見ていた。その踏切は段差が多くて、何度も車いすを揺らしながら渡っていく。その人と私は目と鼻の先において、声を掛けるべきか迷った事も何度もあるが、私は人見知りで声を掛ける勇気がなかった。そんな自分の心にモヤモヤしていた日が続いた。やっぱり話しかけた方がよかったのか？次に会ったら後ろおしましようか？と言えばいいのかとそんな気持ちが湧いてくるけど、結局、私の下校の時間が変わり、会わなくなってしまうった。

福祉って何なのだろうってもし聞かれたら私は健康だから福祉は関係ない。実際、そんな授業があったとしてもあまりピンと来ないことだと思って過ごしてきた。八月のあの日までは。

私は部活で足をケガしてしまった。骨折までとはいかなかったが重度の捻挫だった。二週間だけのギブスをはめる事になった私は、「着け心地が悪いなあ、早くギブス取れないかな。」としか考えていなかった。

しかし、その生活は私の思っていたよりもかなり不便なものだった。自由に歩けない、階段が登れない、周りの目が気になってしょうがない。そして何より大変だったのは学校生活だった。移動はもろんの事、なかなか周りの人に頼れなかった。「手伝ってくれる？」なんて自分から言えない。結局無理してしまう場面がいくつもあった。

「障害を持つ人は大変なのかな？」私はただのケガだけど、目が見えなかったり、足が不自由だったり、とそんな漠然とした考えはあったが、「私には福祉なんて関係ない。」なんて思いはなくなっていた。福祉は体が不自由な人の為の言葉

ではない。初めて大きなケガをして、私は気付かされたのだ。

福祉について少しだけ知った今、私には気がかりなことがあった。あの時、よく帰りに毎日会っていた、車イスの人だ。実際には何も言えなかった自分の無力さに腹が立った。と同時にあの人も、もしかしたら頼る事ができなかったのかな。と思った。「踏切くらい自分で渡れるから、ばかにしないで。」と思われるかもしれない。しかし、踏切以外だって不自由なこと一人では無理なことがある。だから、困っている人は見捨てない。あの時のように見てみぬふりをするということも、体が不自由だから助ける。ということもしたくない。それは、見捨てられるよりも、もつと不快で嫌なこと、どんな人でも困っていたら助けられる人。こんな人に、私は少なくともなりたいと思う。体が不自由な人と健康的な人の境界線は絶対に作ってはいけない。福祉に目覚めるまでの私は、福祉なんて……。という考えがあった。しかし、ケガをして、その大変さ、理不尽さを知った。無力さも知った。もう一度、一年越しであるの踏切のあの時間帯を狙って通ってみようと思う。今の私なら今だからこそ、きっと私はあの人へこう言うだろう。「大丈夫ですか？何か手伝うことはありませんか？何かあったら言ってくださいね。」と。

一年後の出会い、一年後のふれあい、一年後、心の和とし

て。そして、私も「毎日が感謝」と、介護を受ける方も、お世話する介護者の方もみんな、全員が幸せを感じることが出来る社会を目指していけたら良いと思った。自分に出来ることは何かないか。と常にそれを考え、やさしい心、思いやりを持つて行動できる人になりたいと思う。良い行いは、人のためになるだけではない。実は、自分のためにもなるのだ。人を助けることで、幸せを感じる神経伝達物質「セロトニン」の量が増加することが、さまざまな研究でわかっている。また良いことをして報われたと感じると、ストレス度も下がるというメリットを誰もが必要としている。

やさしい心や思いやりを持つて行動できる人になりたいと思う人、それは決して一人では出来ないこともたくさんあると思う。だから、家族や他人にも助けてもらい、介護こそが人をつなぎ、命をつなぎ、社会全体を形成する元だということとを私は強く思う。

## 「考え方を変える」ことで

富山県立南砺福野高等学校 二年

岡田彩鈴  
おかだいろり

私の母が勤めている会社に何人か障がいをお持ちの方も勤めておられます。

企業では「障害者雇用促進法」により、障がいをお持ちの方の雇用が義務付けられています。それに伴って、母が勤めている会社でもそのような方を雇用しているらしいです。

私は母に、障がいをお持ちの方のお給料について聞いたことがありません。母が勤めている会社では、知的障害をお持ちの方を主に雇っていて、事務や清掃の担当として働いているそうです。母や母の同僚と比べると、お給料は少ないらしいです。

私の家族は、誰かを支える下請け企業で働いています。母に障がいをお持ちの方のお給料について聞いたとき、少し疑問を持ちました。母が担っている仕事がなくては世の中は回りません。それと同じように、事務として働いてくれている

方や清掃の業務を担ってくれている方がいなければ、母が担っている仕事が回りません。母も、障がいをお持ちの方も、世の中において「なくてはならない存在」です。それなのに、お給料に差があつていいのでしょうか。

そもそも、障がいをお持ちの方を「下請けの下請け」という認識で働いていただくという企業の姿勢は本当に正解なのでしょうか。私自身も福祉を学ぶまで、「障がいをお持ちの方」はできることが限られる。健常者と同じようには働けない」という概念がありました。

しかし、今は違います。今は「障がいには個性だ」と思えます。

ここまで考え方が変化したのは、福祉を学ぶ中である経験が基になっていると思います。それは「ボランティアでのダウン症を患っておられる方との出会い」です。

ある日、地域の交流会のボランティアに参加しました。そこには、ダウン症を患っている男の子が来ていました。他にも子供はたくさん来ていましたが、その子は誰とも関わっていませんでした。いえ、他の子供たちがその子のことを避けていました。それでも男の子はニコニコしており、お母さんと一緒に遊んでいました。

私は「話してみたいな」という好奇心に身を任せ、その子のところにお話しに行きました。「こんにちは！」と私が言うのと、その子は発語こそできないものの、先ほどよりもさらにニコニコして、「へこっ」と頭を下げてくれました。

お母さんは少し和らいだ表情で話し始めました。

「私ね、出産前にダウン症の疑いがあることが分かったとき、子供を堕ろそうと思ったの。私じゃ育てられないと思って。それでも産んだのは、何度も何度もこの子がお腹を蹴ったから。生きたいんだなあ…と。子育てする上で人の何倍も辛い思いをしてきたと思う。偏見に苦しんだり、ひどいことを言われたりね…」

その言葉の重みに私は涙が出そうになりました。少し怖かったのです。

なぜなら、私自身、これから先、一人の女性として、妊娠を経験したり、出産を経験したり、子育てを経験したり…女性

だけ、感じる事ができる「母性」に夢を膨らませていたからです。その感情から、つい「怖くなかったんですか」と聞いてしまいました。すると、そのお母さんは、少し涙ぐんで、再び話し始めました。

「私ね、この子が生まれて、親としてダメなことを考えちゃったことがあるの。もう楽になっても良いよ、って。最低でしょ。それでも家族の温かさが相まって、この子に人生を捧げようって思えたの。誰だって障がいを持たない、健康で五体満足の子を産みたいって願う。それでも現実、そうはいかないこともある。産んでしまったら責任を持って育てなきゃいけない。私だって、これまでたくさん葛藤してきた。でもね、何があってもこの子が一番かわいいの。社会からひどいことを言われてもね。この障がいはこの子の個性なのよ。話はできないけれど、人なつっこい。いつも笑顔。この子の個性がいつか報われてほしいなあ。」

このお母さんの話を聞いて、怖さが少し和らぎました。そして、障がいに対する見方が180度変わりました。

世の中にはさまざまな障がいがあります。それぞれ、先ほど書いたように「話ができない」などのマイナス面もあれば、「人なつっこい」などのプラス面もあります。しかしそれは、障がいを持っていない私たちにも、共通することなのではな

いでしょうか。完璧な人間なんていないのですから。

障がいをお持ちの方もそうでない私たちもみんなが対等に  
関わり合い、平等な社会になっていけばいいと心から願いま  
す。

# 障害者週間のポスター



【中学生の部】

○最優秀賞

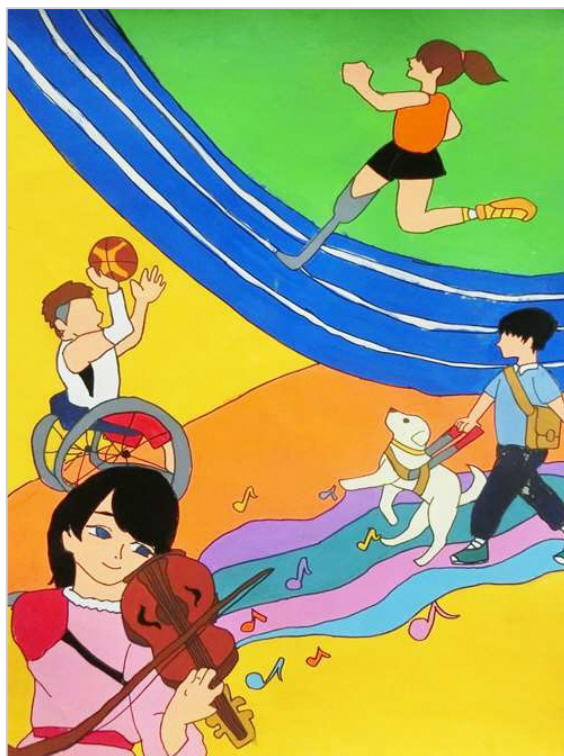
「目に見えない障害」

黒部市立清明中学校 三年

ほそ だ はる い  
細 田 陽 衣

# ○優秀賞

【中学生の部】



「みち」

黒部市立清明中学校 二年

こ ばやし さち  
小 林 幸



「盲導犬は目と同じ」

射水市立小杉南中学校 二年

なが え ゆい な  
長 永 結 菜



# 令和四年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」募集実施要領

## 1. 趣旨

障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う共生社会を目指し、障害者に対する国民の理解の促進を図るため、「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」を募集するもの。

## 2. 主催

内閣府、富山県

## 3. 主管

富山県身体障害者団体協議会

## 4. 後援

富山県教育委員会、社会福祉法人富山県社会福祉協議会

## 5. 募集テーマ

### (1) 心の輪を広げる体験作文

出会い、ふれあい、心の輪 ― 障害のある人となない人との心のふれあい体験を広げよう ―

### (2) 障害者週間のポスター

障害の有無にかかわらず誰もが能力を發揮して安全に安心して生活できる社会の実現

## 6. 応募資格

### (1) 心の輪を広げる体験作文

小学生、中学生、高校生及び一般（義務教育学校、特別支援学校の小学部、中学部及び高等部の児童生徒を含む。）

### (2) 障害者週間のポスター

小学生及び中学生（義務教育学校、特別支援学校の小学部及び中学部の児童生徒を含む。）

## 7. 募集の方法

### (1) 心の輪を広げる体験作文

#### ① 作文の題名(タイトル)及び内容

作文の題名(タイトル)は自由とし、内容は、障害のある人となない人との心のふれあいの体験をつづったものとする。  
なお、応募は、未発表のもの一編に限る。

#### ② 募集の区分

小学生区分、中学生区分、高校生区分及び一般区分の四区分とする。

#### ③ 制限字数、用紙の様式、作成方法等

ア. 一編当たりの制限字数は、小学生区分及び中学生区分については、四〇〇字詰め原稿用紙二〜四枚程度とし、高校生区分及び一般区分については、四〇〇字詰め原稿用紙四〜六枚程度とする。

イ. 用紙は、原則として四〇〇字詰め原稿用紙(B四判又はA四判。縦書き)を使用する。

ウ. パソコン等の電子機器による作成も可とする。この場合、用紙はイ.に準じるものとする。

エ. 第三者が知的財産権を保有する著作物を使用しないこと。

#### ④ 応募者の属性等に関する資料(属性表)

作者の属性表(指定様式)の項目に従い、氏名、住所、年齢(生年月日)、所属先(学校名・学年又は職業)、電話番号、FAX番号、障害の有無・程度、作品の題名(タイトル)及びその他参考となる事項等を記載し、作品と共に提出する。

#### ⑤ 応募先

富山県身体障害者団体協議会

〒九三〇〇〇九四 富山市安住町五十二 TEL〇七六―四四四―〇二二三

⑥ 募集期間

令和四年七月一日（金）から九月一日（木）までとする（当日消印有効）。

(2) 障害者週間のポスター

① 作品の題名（タイトル）及び内容

作品の題名（タイトル）は自由とし、内容は、障害者に対する理解の促進等に資するものとし、障害のある人となない人の間の相互理解・交流等を造形的表現で訴えるものとする。

なお、応募は、未発表のもの一点に限るものとし、作品中に標語それに類する文字は入れないものとする。

② 募集の区分

小学生区分及び中学生区分の二区分とする。

③ 規格、画材、作成方法等

ア・規格は、画用紙のB三判（横三六四mm×縦五一五mm）又はいわゆる四つ切り（横三八二mm×縦五四二mm）を使用し、これに満たない作品は、B三判の台紙に貼付する。なお、作品は縦位置（縦長）のみとする。

イ・彩色画材は、自由とする。

ウ・第三者が知的財産権を保有する著作物を使用しないこと。

④ 応募者の属性等に関する資料（属性表）

作者の属性表（様式）の項目に従い、氏名、住所、年齢（生年月日）、所属先（学校名・学年又は職業）、電話番号、FAX番号、障害の有無・程度、作品の題名（タイトル）及びその他参考となる事項等を記載し、作品と共に提出する。

⑤ 応募先

富山県身体障害者団体協議会

〒九三〇〇〇九四 富山市安住町五二二 Tel.〇七六―四四四―〇二二三

⑥ 募集期間

令和四年七月一日（金）から九月一日（木）までとする（当日消印有効）。

8. 選定

応募された作品については、審査のうえ、各区分ごとにそれぞれ最優秀賞、優秀賞を九月二十二日（木）までに決定し、入選者に通知する。最優秀賞作品は、富山県代表として内閣府へ推薦する。

9. 表彰

富山県で表彰式を行い、最優秀賞受賞者及び優秀賞受賞者にそれぞれ賞状及び副賞（二万円相当、五千円相当）を贈る。また、応募者全員に参加賞を贈る。

10. 個人情報

応募者に関する参考資料に記入した個人情報はこの募集の連絡や参加賞送付のみに使用する。

ただし、入賞者の個人情報は内閣府への推薦や作品集、ホームページの掲載に使用する。応募者は、あらかじめこの旨同意のうえで応募するものとする。

11. その他

作品は原則として返却しない。ただし作品の返却を希望するときは、応募時に申し出ること。

令和4年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」応募状況

1 「心の輪を広げる体験作文」応募状況

	計
小学生	2編
中学生	30編
高校生	84編
一般	0編
合計	116編

2 「障害者週間のポスター」応募状況

	計
小学生	0点
中学生	11点
合計	11点

## 令和四年度

### 「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」審査会審査員名簿

浜谷 尚生 元水橋郷土史料館長

島崎 俊哉 富山県有美術品管理事務員

宮崎 博嗣 富山県社会福祉協議会地域福祉部地域福祉・ボランティア振興課長

布尾 英二 富山県身体障害者団体協議会会長

平野 幹夫 富山県手をつなぐ育成会常務理事

中村 喜久男 富山県精神保健福祉家族連合会理事長

岩井 克行 富山県厚生部健康対策室健康課精神保健福祉主査

城石 祥子 富山県教育委員会県立学校課特別支援教育班指導主事

杉田 尚美 富山県厚生部障害福祉課長

心の輪を広げる体験作文・  
障害者週間のポスター入賞作品集

― 出会い、ふれあい、心の輪 ―

令和四年十一月発行

発行 富山県厚生部障害福祉課

印刷 富山生きる場センター